

安倍能成とは誰だったか？

——彼に語らせずに彼を語る——

高 田 里 恵 子

I. 追悼文合戦

1966年6月7日の早朝、安倍能成が82歳の生涯を閉じる。人物事典風に言えば、カントやスピノザの研究者であり、大正教養主義の代表的人物と見なされ、敗戦直後に旧制第一高等学校（現・東大教養学部）校長から文部大臣になり、やがて若い世代からは「オールド・リベラリスト」と呼ばれ、80歳を越えてもなお学習院院長の要職に就いていた教育者であった。いまは忘れられたと言ってよいだろうこの人物の、青年期からの半生をラフにスケッチすることが本稿の目的である。

当時、安倍能成はなかなかの有名人であった。各全国紙がかなりのスペースを割いてその死を報じることになる。まずはその見出しに注目してみよう。当日の読売新聞夕刊に、ドイツ文学者竹山道雄（1903～84）が「強烈な個性の“非常時男”——安倍能成をいたむ」と題する追悼を寄せている。毎日新聞は「明治の灯、また一つ」「剛毅な「教養人」」という見出しのもと、哲学者天野貞祐（1884～1980）、作家野上弥生子（1885～1995）、岩波書店

キーワード：「漱石文化」、岩波書店、旧制第一高等学校、平和問題談話会、京城帝国大学

会長小林勇（1903～81）のコメントを集めた。朝日新聞は、いつものように翌日の8日付夕刊に長い追悼文を掲載する。哲学者谷川徹三（1895～1989）の「信念の人 安倍能成」。東京新聞も、翌日に社会思想家久野収（1910～99）の追悼文「ベストを尽くした生涯——安倍能成先生の人柄にふれて」を載せた。右、中道、左とすべてそろった追悼文である。

テレビのほうでは、野上弥生子の日記によると、NHKが当日深夜に「安倍さんを偲ぶ」という特番を組んだらしい¹⁾。また、安倍は明仁皇太子（現・上皇）の教育に関わっていたため、逝去の日の夕方、皇太子夫妻、常陸宮夫妻が安倍的の自宅を弔問したことも新聞は伝えている。学習院大学で行われた葬儀には1500人余の参列者と、天皇と皇族から贈られた菊の生花が見られたと²⁾。

雑誌類に目をやれば、しばらくは多くの追悼文が総合雑誌や文芸誌に登場する。岩波書店の『世界』を筆頭に、保守系雑誌として知られる『心』、学習院大学の『輔仁會雑誌』、旧制第一高等学校の卒業生が中心となつてつくっていた同人誌『ももんが』が安倍能成追悼特集を組んだ。

つまり、第一級の著名人の死という扱いだつた。

いや、大勢の一般の人びとが安倍の死を悲しんだのだと竹山道雄は振りかえる。「安倍能成先生が亡くなると、それにすぐ先立たれた小泉信三先生と共に、ほとんど国民的哀悼という観を呈した。こういうことはおそらく山本五十六元帥以来かと思う」³⁾。

現在、安倍能成の名が一般にもほとんど忘れられ、彼の学問的業績が言及されることは皆無に等しいのを考えるといくぶん不思議な感じもするだろう。

当時多くの追悼文が書かれた理由の一つは、安倍能成の死が、ある時代の終わりを告げているように見えたからである。毎日新聞が「明治の灯、また一つ」と書いているように、安倍の死の一月ほど前に、小宮豊

安倍能成とは誰だったか？

隆（1884～1966）と小泉信三（1888～1966）が続けざまに亡くなっている。安倍と小宮は旧制一高時代の同級生であり、ともに漱石門下として知られていた。東宮教育参与であった小泉信三は、安倍とともに敗戦後の象徴天皇制を支えたとされている。

もっとも、1880年代に生まれた彼らが本格的に活躍しはじめたのは、大正に入ってからであり、むしろ鷗外（1862～1922）や漱石（1867～1916）などとは明確に区別して扱われていたのに、重なった逝去のニュースに慌てたか、あるいは2年後に明治百年も迫っていたからか、妙に「気骨の明治人」⁴⁾の終焉が強調されてしまったと見える。清水幾太郎（当時、学習院大学教授・1907～88）は、「[安倍学習院]院長の死を悼む多くの文章の中で繰返されているのは、院長の御逝去によって明治の偉大な精神が失われたという点であります」⁵⁾と言ったあと、その間違いを皮肉っぽく修正している。

1953年に出版された「昭和文学全集」（角川書店）の第10巻は安倍能成、天野貞祐、辰野隆（1888～1964）という、やはり1880年代生まれを集めた巻になっているが、その帯紙にはこう書かれていた。「日本の興隆期に青春時代を得た三人の同時代人は教育家・文明批評家・随想家等その姿勢こそ違え、夫々真善美の世界を探求し、不屈なる精神は三代を貫き、崩れゆく敗戦日本の道義を支えて来た。この日本のバックボーンの随想録は生ける「近代日本精神史」である」。

宣伝文なのでいささか褒めすぎではあるが、たしかにここに示されているように、彼らは日露戦争勝利後の明治日本の安定期に青春時代を過ごし、いわゆる大正デモクラシー時代に人生の最盛期を迎え、日に日に言論の自由が奪われていった1930年代後半には、すでに中年から老いの下り坂にさしかかっていた。ところが敗戦後、古き良き日本（そんなものがあつたとしてだが）を知る老人として復活し、はからずも「崩れゆく敗戦日本の

道義」を体現してしまう。

しかし一番大きな理由として挙げたいのは、安倍自身が多くの追悼文を書き、また弔辞を読みあげていたことである。こうした追悼を別にしても、安倍は実に多くの同時代人についての言説を産出した。その文章は時に他人の私生活に踏みこみ、好悪を剥きだしにし、率直だけれども少々品位に欠けるようにも映り、それを正直な文章として半分面白がりながら評価する向きもあれば、不快げに眉を顰める向きもあるといった受けとめ方をされた。そして当該人物たちが死に絶えた現在では、貴重な資料的価値が思いがけず残った。

「相当迷惑され、かつ憤慨している人士も少なくない筈である」と、円地与四松（円地文子の夫・1895～1972）は言う。こういう安倍に対しては、多少は仕返しをしてもよいのではなかろうか。「人を中傷して平気であった安倍氏に対して、これこそ礼儀であり、地下にあって喜んでこれを受けられるに相違なく、安倍氏の冥福を祈る途でもあろうか」⁶⁾と円地は続ける。漱石全集の編集の件で安倍に若干の恨みを抱いているらしい、漱石門下の後輩林原耕三（1887～1975）も、「安倍さんは凡そ非夏目漱石的な人柄であった」と断じる。夏目先生は「デリカシーの持ち主だった」のに、安倍は正反対だというのである。「その他、安倍さんには俗気が多分にあり、街気に似たものがあり、野心家であった。あの率直、朴訥が売物であるという風に感ぜられる節があった」⁷⁾と厳しい見方をしている。20代の時からの古い友人である野上弥生子は、安倍の露悪的直言に悩まされてきた者の一人だが、「悪口はお互いに告別式の時にしよう」⁸⁾という約束どおり、「ずかずか」⁹⁾と安倍を批判した、ある意味では真情のこもった追悼文を『世界』に寄せている。安倍も当時としては長生きであり、だから多くの追悼文を書けたわけだが、もうすぐ百歳というところまで生きた野上弥生子にはかなわなかった。

安倍能成とは誰だったか？

こうして安倍自身が社交辞令的でない、率直な（あるいは、率直を「売物」にした？）文章を大量に書いたことに対応するかのように、安倍への親愛と反発を込めた追悼文や思い出記、安倍のまだ存命中に書かれた批判や賞賛などが数多く残された。本稿がその題名に掲げたように、二種類もの自叙伝を書いた安倍能成自身の文章を一切引用することなく、安倍をめぐる言説のみで「安倍能成とは誰だったか」を描くことができそうなのは、このお陰である。

Ⅱ. 安倍能成が現代でも唯一研究対象になるとき

清水幾太郎は追悼文のなかで、「院長には何冊かの著書がございます。しかし、正直に申しますと、その中で今後も大いに有意義であるようなものは、殆んどないのではないかと思います」¹⁰⁾と述べている。清水幾太郎の辛辣な予言は見事に的中した。と言いたいところだが、あとで詳しく扱うことになるが、安倍の学問的業績の無価値性はすでに戦前から言われていた。むしろ、現在でも、あるいは現在だからこそ言及され、研究の対象になる安倍能成の文章が立派に存在することを誰も予言しなかったことのほうを指摘したいくらいである。それは安倍の京城時代の文章である。

1926（大正15）年3月、安倍は、新たにつくられた京城帝国大学法文学部に赴任する。帝国大学教授になる前に、文部省から約1年半のヨーロッパ留学も与えられた。1909（明治42）年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業したあと、安倍は漱石の世話で朝日新聞文芸欄に記事を書いたり、同郷の高浜虚子（1874～1954）に誘われて『ホトトギス』で文芸批評を担当したり、旧制一高以来の親友岩波茂雄（1881～1946）が立ちあげた弱小出版社で叢書や翻訳を出したり、そこそこに名の知られる書き手になっていたが、その実質は「高等遊民」であり、生活はあまり安定したものではなかった¹¹⁾。そうした長い期間を経て、1918年の大学令によって大学に昇

格した私立大学教授を少しだけ務めたあと、42歳にして帝大教授になったわけである。

ただし、植民地に建てられた帝国大学であった。そこから生まれる内心の葛藤や、見て見ぬふりをした後ろめたさを、安倍は戦後、正直に告白しているが、たしかに15年間にわたった朝鮮半島での単身赴任生活のあいだ、独身の旅人の気楽な態度に終始した。これは比喩ではなく、実際、京城の街を精力的に歩きまわり、さまざまな場所を訪れ、変わった食を試し、そしてそれをエッセイに書いたのである。1932（昭和7）年にはそれらを集めて冒頭には「旅心」なるエッセイを掲げた『青丘雑記』（「青丘」は朝鮮の雅名という）を岩波書店から出版し、「文部省推薦図書」にまでなっている¹²⁾。

こうした京城時代の安倍について論文が書かれるとき¹³⁾、人格主義と自由主義を掲げたはずの大正教養主義者の限界が、とりあえずは指摘されることになろうか。こう言ってよければ、京城帝国大学における安倍能成を批判的に扱うのは比較的書きやすいテーマである。

芳賀徹（東大教授、国際日本文化研究センター教授・1931～2020）のような保守派は、安倍の旅人の態度のなかに「広く世界を見て、深く感じ、自由に考えようとする一人の知的エリートとしての自負、自覚」を見いだし、高く評価している。もちろん、芳賀も安倍能成がすでに忘れられた人物であることを強調する。芳賀が旧制一高の最後の入学生として教養主義の残光を体験しているだけに、次の言葉は一種の感慨をおびている。「安倍能成の著作で、いま〔1994年〕文庫本なんかに入っているものは一つもないようであります。そして、安倍能成にはドイツ近代哲学に関する本が戦前いくつもあったのですが、そういうものはもう一切読まれていないようであります。カント哲学とか、あるいは近世・近代ヨーロッパ哲学史とか、そういうものについての概論書のようなものを数冊、岩波書店から出して

安倍能成とは誰だったか？

おりましたが、そんなものもうあまり読む人はなく、忘れられているようでもあります」。しかし哲学者としては忘れられても、「近代日本の文人、知識人の朝鮮に対する態度の歴史の中で、確かにこの安倍能成という人のケースは、十分に一つの章をなすに値するのではないか」¹⁴⁾と結ばれる。

芳賀徹の言葉は間違っていない。たとえば、2015年に出版された『日韓併合期ベストエッセイ集』（ちくま文庫）では、43篇のエッセイのなかで10篇が安倍能成のものである。編者の鄭大均は序文で、「これは少しバランスに欠けた印象を与えるかもしれないが、戦前から戦後にかけての安倍の存在感やそのエッセイストとしての力を知るものには違和感はないはずである」¹⁵⁾とわざわざ断っている。

しかし、安倍能成の人生のなかでこの京城時代を捉えてみると、親友岩波茂雄の出版社から次々と雑文集（実際に雑文集なので、こう表現する）を出していたにもかかわらず、あるいは雑文集の腑抜けた印象のせいで、書き手としてのインパクトは失っていた時期と言える。昭和の初年は、インテリ界におけるマルクス主義の席卷のために、安倍だけでなく、大正教養主義の書き手が流行らなくなっていた。

1940年9月、安倍能成は母校の旧制一高に校長として帰ってくる。当時一高の講師であった林健太郎（後に東大総長・1913～2004）はその時の感じを次のように書いている。「安倍さんが一高校長になったことは当時既に一つの事件であった。我々若いものの間では、新進学者としての三木清や大家としての西田幾多郎の名は声高く喧伝されていたが、漱石全集に出てくる安倍能成という人物は既に過去の、あるいは別世界の存在として久しく意識の中から遠ざかっていた」¹⁶⁾。

たしかに安倍能成はすでに過去の人物であった。しかし、弾圧によってマルクス主義が壊滅した1930年代後半、河合栄治郎編集の『学生叢書』全12巻の貢献もあって教養主義が復活するとともに、若い学生たちにも

再び知られる存在にはなっていた。『学生叢書』にたびたび寄稿しただけでなく、シリーズ中の『学生と読書』（1938）の巻末に付けられた「必読書目」のなかには、先ほど芳賀徹が忘れられた書物として挙げていた安倍能成の諸著作が並んでいる¹⁷⁾。もっとも、1913（大正2）年に出版された安倍の最初の著書である『予の世界』（これも雑文集である）までリストにあがっているのには、いくぶん首をかきあげたくなるが、ファシズム期における教養主義のゾンビ的復活がどのようなものであったかをよくあらわしているとも言える。

Ⅲ. 「非常時男」と「セカンドアベ」

あの1940年という時点で旧制一高の校長になったことは、安倍をいよいよ「学問」から遠ざけたが、「教育家」という曖昧な称号を受け、敗戦後の混乱期における活躍の道を思いがけず開いた。軍部はエリートの自由主義の砦と見なされていた一高を痛めつけたが、その軍部の圧力に負けなかった一高校長というイメージが安倍にくつつくことになったのである。すでに1943年の雑誌記事で「生徒を愛する一面、上の方にはズバズバものを言う痛快味」などと紹介されている¹⁸⁾。漱石門下の古い友人である森田草平（1881～1949）の証言が愉快である。安倍校長の発言を心配して、「安倍さんも調子に乗って、あんな風に喋舌っていると、今に足許をすくわれるぞ」と、森田に注意したひとがあったという。「それが彼〔安倍〕の人徳の致す所か、別段足許もすくわれずして済んだばかりでなく、それ等の言説から、何処か毅然とした所のある自由主義者として世間に認められたことが、今日の危機に際して、彼が文相の椅子に就く原因の一つにもなったであろうことを思えば、世の中は不思議なものだと云わざるを得ない」¹⁹⁾。

一高教授として安倍校長を支えた竹山道雄ならば、こう言う。「先生の

安倍能成とは誰だったか？

面目は、激動期の苦しい時ほど発揮された。圧迫が加わるほど撥ねかえした。もし非常時がなかったら、先生は学界の長老として野心のない生涯を過ごされただろう」²⁰⁾。

もっとも、安倍能成の直言が生きたのは、むしろ敗戦後、アメリカ占領軍にたいしてだったのかもしれない。当時一高に在学していた経済学者の宇沢弘文（1928～2014）は、ジープで一高に乗りこんできたアメリカ人に、安倍校長が果敢に立ち向かったさまを伝えている。「その時に校長だった安倍能成先生が、その占領軍に対して、「この一高はリベラルアーツの学校である。リベラルアーツとは人類が残してきた芸術、文化、学問のことであり、ここはその偉大な遺産を次の世代に伝える sacred place（聖なる場所）だ。そこを占領などという vulgar（世俗的）な目的のために使わせるわけにはいかない」と言って、追い返したのです。私は深い感銘を受けましてね。／すばらしかったですね。当時、絶対的な権力を持っていた占領軍に対して、教育者の倫理観から立ち向かわれたのですから」²¹⁾。

宇沢弘文のような著名な（だけでなく、社会問題に誠実に取りくむ）卒業生にこのように言ってもらえるのは、エリート校校長の役得であろうか。安倍能成が1946年1月、幣原喜重郎内閣の文部大臣になったのも、一高がらみの人事であった。一高時代の友人であった前田多門（1884～1962）が公職追放にかかって文部大臣を辞めるさいに、後任として安倍を強く推したのである。結局、幣原内閣の解散とともに安倍も辞任し、わずか3か月の文部大臣生活であったが、この時、安倍の直言癖が最もプラスの効果を発揮した。

1946年3月、アメリカ教育使節団が来日する。敗戦日本にたいして教育改革に関わる勧告をするために、教育学者らが現地調査にやって来たのである。安倍文部大臣は使節団への挨拶のなかで、日本はかつて勝者の奢りで植民地にたいして自分勝手な教育政策を押し付けてしまったが、あなた

がた勝者はどうぞこの失敗を繰り返さないでほしい、と述べた。

その時の模様を、安倍の挨拶を徹夜で英訳した神谷美恵子（前田多門の娘。精神科医として皇太子妃の相談役を務めたことでよく知られている。1914～79）の3月8日の日記から引こう。「徹夜したままの姿で私は大臣のとなりの最前席に着かされ、すぐに教育使節団を迎えての第一回会議がはじまる。私は大臣の挨拶のことばかり心配だったが、安倍さんは始終堂々とふるまわれ、ゆっくりと英語を発音されたので米国人にもよくわかったらしい。外人間にも思いのほか好評らしく、早速謄写版刷りにするからとて、ミスプリントのあるまま、ニュージエント中佐に英訳原稿を持って行かれてしまった（これはすぐ英語の新聞に全文載った）。会のあと、室の片隅で小さくなっていたら、津田英語塾塾長の星野あい先生（委員の一人）が、涙をいっばいためて、よろこびに来て下さった。午後は大臣和文挨拶文の新聞発表検閲の交渉で過ぎた。/ともかく、大臣の演説内容は、私たち日本人に胸のすく思いをさせてくれた」²²⁾。

安倍の堂々とした振舞いは新聞に報道され、「胸のすく思い」を味わった日本人は多かったらしい。この逸話は安倍への追悼文でもよく出てくる。また、アメリカ教育使節団の勧告に基づいて実行された学制改革について、その後多くの研究論文が書かれることになるが、安倍はその重要な登場人物となる。

しかし主役ではない。主役は、当時東大総長であった南原繁（1889～1974）だった。旧制高校が廃止されて新制大学が誕生し、6・3・3制が採られるにあたってどういう経緯があったのかここでは触れないが、いずれにしる南原繁の圧倒的な指導力のもとで（安倍から見ると、自分たちを巧みに騙して）遂行されたことは間違いない。安倍はあらゆるところで南原の悪口をそれこそ正々堂々と言いまくって、人びとを困惑させ、現在ではこの南原と安倍の対立が学制改革の実態を解明する上での手がかりの一つ

安倍能成とは誰だったか？

と見なされている。丸山眞男（1914～96）の困惑を見ておこう。「安倍先生は安倍先生で、岡武義先生が学習院大学に行かれた時、南原先生の悪口をひどく言われて、さすがの岡先生もたまりかねて、自分で部屋を出たと言っていました。安倍先生はぼくにむかっては、「丸山くん、よくあんな人の弟子になっている」と言うのだから（笑）、ひどいものです」²³⁾。

さて、ここで20世紀の初めに少し戻ろう。安倍能成が体験した「非常時」はファシズムと敗戦の時代が最初ではなかった。日露戦争前後は近代日本の大きな転換点、あるいは、国際世界での地位の相対的安定に反比例するような精神における激動期と見なされているが、そのなかの現象の一つがエリート青年たちの「煩悶」であった。立身出世を約束されているはずのエリートたちにとって、天下国家をどうこうするという問題ではなく、個人の内面が重要になった、といったように当時の変化が説明されることが多い。

その時の主役は、1903年5月華巖の滝で投身自殺した一高生、藤村操（1886～1903）である。安倍能成は藤村操の同級生として大きなショックを受け、「煩悶」し、落第までしてしまう（落第を重ねた岩波茂雄はついに退学になる）。このあたりを扱った文化史には安倍能成の名は必ず登場し、何より安倍の自伝的記述が貴重な資料になっている。1912年（大正元年）12月には藤村操の妹と結婚する安倍能成は、藤村操物語のなかの重要な脇役なのである。

藤村操周辺の一高生たちが、のちに漱石門下となり、東京帝国大学哲学科でケーベル（1848～1923）に学び、やがて大正教養主義の書き手（あるいは、岩波茂雄のような出版者）となったことは、繰り返して語られてきた。この時のスターは、言うまでもなく、阿部次郎（1883～1959）である。大正教養主義のバイブルだった『三太郎の日記』（1914、『第二 三太郎の日記』は翌1915年に岩波書店より刊行）も、安倍の著作同様にいまでは

ほとんど読まれなくなったとしても、文化史のなかでは不動の位置づけをもっているだろう。

安倍と阿部はまとめて「両アベ」などと言われる時もあったが、ケーベル先生は安倍能成を「セカンドアベ」と呼んで区別した。「両アベ」は同い年であるが、2年先に哲学科に進んだ阿部のほうが「ファーストアベ」になったわけである。また、漱石の妻鏡子の『漱石の思い出』に登場する有名な話であるが、1910(明治43)年8月に漱石が伊豆修善寺で倒れたさい、たまたま沼津に滞在していて一番に駆けつけた安倍能成を見て、鏡子は「アンバイヨクナルだから、この病気はきつとなおると御幣をかついだ」²⁴⁾という。阿部と区別するために、安倍は「アンバイ」となったのである。

宇野浩二(1891～1961)のような地味な作家は、同じく地味に二番手に甘んじた「アンバイ」のほうが好きだったと言っている。「私(あるいは私たち)が二十歳の文学書生時代に、安倍能成は、新進の評論家として、はなばなしく、活動した。同じ頃、阿部次郎も、やはり、新進の評論家として、もてはやされた。そうして、この二人は、ほんの少しではあるが、書くものが幾らかは似ている上に、同じ『アベ』であるから、私たちは、それを区別するために、能成の方を『アンバイ』とよび、次郎の方を『アベ』と称した。ところで、書かれている事は別にして、『アンバイ』の文章は、滋味はあるが、地味であり、『アベ』の文章は、わかりよい上に、一種の調子がついていたので、一般には、(『三太郎の日記』などというものがあるので、)非常にうけた。が、その反対に、一部には、「能成の方が、……」というものも可なりあった。私は、もとより、『アンバイ』組の方であった」²⁵⁾。

IV. 「学問」とは何か

華やかな葬儀で見送られた安倍能成であったが、高度成長期に入ったこ

安倍能成とは誰だったか？

ろから、いや、あるいはもっと早く、占領時代が終わるところから、つまり「非常時」が終わると、たんなる曖昧な保守的文化人といった位置におさまるようになっていた。共同通信記者だったジャーナリスト原寿雄（1925～2017）の日記にはこうある。「朝、安倍能成死ぬ。一高の落書きに、カントの墓に押しつぶされた天野貞祐とカントの墓からはみ出た能成を並べていた傑作を思い出し、記事のどこかに入れようと考えたがうまく入らず。学習院出のZ記者が「皇太子の成績は中の下ぐらいのものだ」と平気で公言していたという能成の学習院時代のエピソードなどを折り込んでまとめる。経歴記事を書くうち文化勲章をもらっていないのはおかしいように思って確かめたが、やっぱり受章者でないとわかる。「学者としては何の業績もありゃしないさ。哲学の本といっても解説書みたいなものばかりじゃないか」と文化記者の弁。若い記者は能成が岩波の平和問題懇談会^(ママ)のメンバーだったことを知らず、“歴史”を感じさせられた²⁶⁾。

海軍経理学校在学中に敗戦を迎えた原寿雄は10月に旧制一高に編入学し、安倍校長に出会っている。ゴリゴリの軍国少年であったという原寿雄自身の大きな変換点であった敗戦と、その敗戦直後の安倍能成の活躍を知らない若い記者を見て、戦後は遠くなりにはけりという気持ちになったのであろうか。

学者としての業績がないということは、なぜか繰り返しかえし言われており（最も好意的な竹山道雄すら認めている）、若い記者にも伝わっていたわけである。一高生たちは安倍校長を熱狂的に歓迎したと言われているが、こんな思い出を語る者もいる。「寮生一般の「自由主義の守護者」とか、「漱石門下の哲学者」とかいった新校長に対する表現が私の心を一層冷却せしめた。かえって一般寮生の主流とは別個の見方をして、「安倍能成は哲学者としては二流、批評家としては小林秀雄を一流としたときに三流、作家としては作品を残していない」などと云った、私の周囲の友人の冷ややか

な言葉が私の耳を捉えた」²⁷⁾。

帝国大学教授のわりには学問的業績がない、岩波書店から出されている本のわりには中身が薄い、安倍に近い阿部次郎や和辻哲郎（1889～1960）や田辺元（1885～1962）などと比べるとオリジナリティが欠けている等々。たしかにすべて事実なのだが、これとは離れて、安倍の無業績をめぐる言説は別の問題を浮かびあがらせるように思われる。

外国、とりわけ欧米の哲学や文学のたんなる「紹介」（翻訳や概説）を「学問」とは見なさないとなると、実証的・文献学的研究か、西田幾多郎（1870～1945）や田辺元や和辻哲郎のように独自の哲学体系を打ち立てることが「学問」となるのだろう。人文系の文化勲章受章者の業績を見ると、文献学的研究が成立する古い時代の文献を扱っていることが多いのはこうした事情による。日本の人文学が抱えるこの嫌らしさに安倍能成の無業績問題は関わっている。

安倍の若いころ、「紹介」の仕事は、現在の研究者にとっては羨ましいような、まさに無人の野を行くがごとき状況にあった。2年前に創業したばかりの岩波書店が1915（大正4）年に「両アベ」の編集のもとに創刊した「哲学叢書」は、思いのほか売れて岩波書店のその後の発展に寄与することになるが、安倍も親友の出版社のためにひと肌脱いで『西洋古代中世哲学史』と『西洋近世哲学史』を出す。しかし、それはヴィルヘルム・ヴィンデルバントの翻訳もしくは超訳であり、現在の視点から見れば自著とは言えないかもしれない²⁸⁾。その後他の研究者によって、どんどんと（本物の）翻訳が出版されていくと、安倍の本は霞んでいかざるをえなかった。

もう一つ、さらに注目すべきは、「漱石＝岩波文化」「漱石の教養」にたいする批判である。これは、1936（昭和11）年にマルクス主義哲学者の戸坂潤（1900～45）が使った言葉なのだが、戸坂は、この高度に洗練された「教養」は「既成文化の享受」にすぎないと指摘した。「破壊的再構成的な教養は、

安倍能成とは誰だったか？

現象としては却って教養なく見えるもの」ではないのか。そして、こうした「漱石的教養」は「もはや漱石自身の文化的伝統とは必ずしも関係のない現象とも」なって、「両アベを始めとして」漱石門下の「秀才」たちが受け継いでいる、と²⁹⁾。

この戸坂潤の言う「門下的漱石文化」にたいする批判を、もう少しわかりやすくしたのが、多々羅三平というペンネームの人物（『吾輩は猫である』の登場人物・多々良三平のつもりか）の「漱石門の人々」である。これは戸坂潤の論考より1年前、1935（昭和10）年に発表されている。

多々羅三平は、漱石門の人びとはみな粒ぞろいだと褒めあげる。「社会生活に常識的に適応して、相当の世間的地位を築き上げる能力あるものばかりだということだ。そのかわりに、一人として、巨大なるもの、天才児の面影をやどした叛逆児も認められないということだ。みんな伶俐で、世態人情に通じ、スマートで拔目なく、若干のデリカシー、若干の精神生活の深さを具えた、日本の文化生活の、最も高級な、インテリゲンチヤのタイプを構成しているということだ」³⁰⁾。とりわけ、両アベ、小宮豊隆、和辻哲郎は帝国大学教授にまで昇りつめた。「両アベの如き、将来の学長候補者とつたえられる。/それだけに、彼等の社会的地位の堅実さを加えらるとともに彼等の評論の生彩を失いつつあることも、又見のがすことを得ない」³¹⁾。

このような帝大系・岩波系の漱石門下にたいする（ある意味では凡庸な）批判は戦後にまで受け継がれた³²⁾。奥野健男（1926～97）は「日本のいわゆる文化人と呼ばれる不可思議な種族の形成に、漱石門下が最も大きな役割を果たした」と指摘する。彼らは「豊かな教養と広い知識とよい趣味を持ち礼儀正しい」が、「一事に徹底した者の持つ、強い背骨と、体系的な論理と深さに欠けている」。「安倍能成はほんとうは何が専門であるのか、わからないといった具合である」³³⁾。本多顕彰（1898～1978）は「作家と

学者の中間の趣味人」などという表現を用いて、漱石門下の帝大教授たちは、寺田寅彦(1878～1935)も含めて結局、学者にも作家にもなりきれなかったのだと嘆く³⁴⁾。

こうして見ると、安倍能成の学者としての冴えなさは、帝大系・岩波系漱石門下の悪い部分が集約されたもののようにも思えてくるだろう。

ところが、ここで大逆転が起こる。

戦後に大正教養主義批判を展開した唐木順三(1904～80)も、戸坂潤の「漱石＝岩波文化」批判の系譜に連なっている。『現代史への試み』(1949)はいまや教養主義批判の古典とも言えるが、この本のなかで唐木は大正教養主義の書き手たちを「教養派」と名付け、明治の修養と大正の教養とを対比させた。教養主義は、修養が備えていた人間形成の「型」を失い、「あれもこれも」と文化を気楽に享受することにすぎないと批判したのである³⁵⁾。

この唐木の安倍にたいする発言を見てみよう。場所は安倍や和辻を追悼する座談会である。

唐木　　つまり、僕はね、明治人と言う時にね、明治維新前後に生まれた人を、明治人というふうに言うんですよ。

市原　　そんならそうですね。

鈴木　　だから、つまり唐木さんの言う教養派という世代だね。

唐木　　まあ、教養派だな。ただその中じゃ、あまり学問が出来なかった安倍さんだけは異色だよ(笑声)。

鈴木　　そういう事になるよ、或る意味ではね³⁶⁾。

亀井勝一郎(1907～66)も同じようなことを言っている。「所謂岩波派の中に、傑出した人物が二人だけいる。岩波茂雄と安倍能成である。そしてこの二人とも、岩波派の他の学者思想家の中においてみると、どちらも「無学文盲」で、教養派の域を脱しているところが興味深い。漱石の熾烈

安倍能成とは誰だったか？

な倫理を今日に継いでいるのは安倍能成氏である」³⁷⁾。

さて、最後に明かすと、学問的な業績がないということを一番主張していたのは、実は他ならぬ安倍能成自身であった。だから、他の人間も、まだ安倍が存命中にも平気で口にできたのである。なかなかの度量の持ち主であった。社会学者の佐藤卓己は、「〔安倍は〕岩波書店の出版に値しないと認めるだけの学問的誠実さを持ち合わせていた。そうした誠実な知識人は大学行政の世界にこそ必要であり、安倍は岩波書店顧問ばかりか、一高校長、文部大臣、学習院長などを歴任することになる」³⁸⁾と、現在の大学人ならつい苦笑いしてしまうような褒め方をしている。

V. バランス感覚について

大宅壮一（1900～70）の批判的な追悼文も岩波書店と安倍能成との関係を取りあげている。「元文相で学習院長の肩書をもつ人物が、日本の反体制イデオロギーを完全に掌握し、リードしている出版社の重役、もしくは最高のブレーンとしての地位を確保しつづけてきたということは、驚嘆に値するアクロバットである。相反する二つの最高権威を両手ににぎって、綱わたりをしているのだともいえる。それができたというのは、安倍氏が岩波茂雄との多年にわたる個人的なつながりに基いているのであるが、この形態は、きわめて日本的であり、封建的である」³⁹⁾。

古い人間関係で結びついている在りようは、あるいは「日本的」と言えるのかもしれない。岩波書店は最後まで安倍長老を切ることはできなかった。安倍の死後、1966年11月に自叙伝『我が生ひ立ち』を出版。翌68年には最後の雑文集『涓涓集』を、岩波書店編集部がまとめている。編集部による「あとがき」のなかでは、「内容の重複しているものが多いことを発見した」と遠慮がちに口にされ、「〔安倍先生は〕皇室に深い関係をもたれた。時勢を憂えて発言されたものも多い。しかし、それらは大体同じ趣

旨のものであったので、本書に収めた数は少なくなった⁴⁰⁾と断り書きがされている。もっとも、「内容の重複」と「大体同じ趣旨」は、岩波書店から出版された他の雑文集にもあてはまるのだが。

しかし大宅壮一の言葉をそのまま受けとれない部分もあるのは、1946年4月の岩波茂雄の死後、岩波書店自体が変化したことも事実だからである。それを最もよくあらわしているのが、安倍能成が、自ら創刊に関わった雑誌『世界』から手を引いたことである。敗戦直後、日本の精神的再建をめざす自分たちのグループ同心会の同人誌の発行を計画した安倍は、親友の本屋に話をもちかける。それが『世界』であった。ちょうど、1917(大正6)年「両アベ」が中心となって同級生の元古本屋さんから同人誌『思潮』(のちの『思想』)を出すことになったのと同じノリである。

こうして1946年1月に『世界』が創刊された。巻頭論文はもちろん安倍能成が書く。しかし発刊とほぼ同時に安倍が文部大臣となったために、あとの業務を労農派マルクス主義者の大内兵衛(1888～1980)が引き継ぐことになった。編集長はコペル君こと吉野源三郎(1899～1981)。そして4月に岩波茂雄が亡くなる。この時期の『世界』を代表する論文「超国家主義の論理と心理」(1946年5月号掲載)を、まだほとんど無名であった若い丸山眞男に書かせた編集者、埴作楽(1913～90)は共産党員であった。安倍能成らのグループとはこれではやはり反りがあわず、岩波茂雄の死もあって、結局、安倍能成らは1948年7月に自分たちの雑誌『心』を創刊し、別に何のいざごもなくスッと『世界』から離れた。この『心』と『世界』をめぐる経緯は、敗戦直後の進歩派と保守派の一つの関係を描きだす格好のエピソードとして、いろいろな場所で紹介されている。

もう一つの「アクロバット」は、吉野源三郎が中心となってできた「平和问题談話会」の議長を安倍が引き受けたことである。吉野は、安倍が一高の非常勤講師として倫理学を講じた時の教え子で、吉野の優秀さと誠実

安倍能成とは誰だったか？

さを安倍は買っていたので、こうした人間関係から大役を引き受けたらしい（もっとも、会の実質的な運営は清水幾太郎が担ったのだが）。

「平和問題談話会」は、いよいよ冷戦時代に入った1948年12月に中立や世界平和を掲げた宣言をし、1950年には全面講和、非武装中立、軍事基地撤廃の主張を展開する。ところが、議長である安倍能成はあちこちで共産党嫌い・ソ連嫌いを唱えており、その連関から、全面講和や非武装中立とは反することをつい口走ったりした。こうした矛盾、というか、むしろ、いい加減さについては数々の証言があるので、別の論考で取りあげたいと思う。いずれにしろ、安倍能成は冷戦の嵐にもまれた典型的な人物である。安倍能成がいまでは忘れられている理由の一つは、冷戦も遠くなりにつれという現況であろう。

吉野源三郎は安倍の矛盾をやり過ぎた。さまざまな見解をもつ学者たちが集まった難しい会であった「平和問題談話会」を適当にまとめてしまう安倍の不思議な力をうまく使ったと言えるかもしれない。野上弥生子の日記のなかで、安倍には失望しているはずなのに、「『世界』の〕丸山氏との追憶^(ママ)の対話もあの程度にしかできない」⁴¹⁾と書かれてしまった吉野源三郎であるが、いい加減な安倍能成のもっていた「抱擁力」^(ママ)を懐かしんでいるようすは、この追悼対談からも伝わってくる⁴²⁾。

冒頭の紹介で述べたように、安倍能成はその発言内容から時には保守反動と非難され、1965年にベストセラーとなった山田宗陸の『危険な思想家——戦後民主主義を否定する人びと』にも登場している⁴³⁾。しかし安倍自身はリベラリストと名乗りつづけ、そのせいで若い世代からは少し揶揄を含んで「オールド・リベラリスト」などと呼ばれもした⁴⁴⁾。

久野収、鶴見俊輔、藤田省三の『戦後日本の思想』では、『心』のグループについてこう言われている。「戦前、このグループは意識した保守主義者ではなかったように思われる。それがオールド・リベラリストと呼ばれ

る理由で、この人たちはむしろ自分はリベラリストだと思っていた。しかし、このグループの人々の果たした思想的、政治的機能からいえば、リベラリズムというより、むしろ保守主義といったほうが一層あたっているように思う」⁴⁵⁾。

これは久野収の言葉だが、すでに触れたように、東京新聞（1966年6月9日）に安倍の追悼記事を書いている。「文化上の自由主義と政治上の保守主義との良識的ミックスが、先生の立ち場であり、この立ち場の分析は『現代日本の思想』の中で、私は私なりにやったつもりであるから、ここではくり返さない。ただ、先生の個性は、この良識が理念と経験、思考と情念の両足でバランスをもって立っているところにある」⁴⁶⁾。

この「バランス」というのは、サンケイ新聞（当時）に出された大宅壮一の追悼文の言う「アクロバット」的「綱わたり」と同じ趣旨であろう。左右からの見方が一致するのも、安倍能成の人徳のなせるわざである。

まことに森田草平が苦笑いしながら言うとおおり、「人徳の到す所」と言うほかない。最後にもう一つ、安倍能成の気楽な言行不一致と、それを笑ってやり過ごしてもらえる安倍の人徳の例を竹山道雄の話から引いておこう。「先生にはずぼらなところもあったと書いたが、その一例——「わたしは〔国語審議会会長として〕新カナ採用の責任者である。だが、自分では旧カナを使っておる」。ふしぎなことに、それがそのまま通った」⁴⁷⁾。

清水幾太郎は「正直という自己同一性」⁴⁸⁾と、例のごとく皮肉っぽく表現している。そう言えば、安倍能成が色紙を求められて書く言葉は「正直第一」だそうである。

註

- 1) 1966年6月7日の日記『野上弥生子全集』第Ⅱ期第15巻（岩波書店、1989）394頁。

安倍能成とは誰だったか？

- 2) 1966年6月7日付朝日新聞夕刊, および6月10日付夕刊。
- 3) 竹山道雄「安倍先生随聞記」(初出1966)『主役としての近代』(講談社学術文庫, 1984) 199頁。
- 4) 朝日新聞の当日夕刊にも「小宮豊隆, 小泉信三両氏と気骨の明治人が逝ったことは病床の安倍さんにとってたまらなくさびしかったようだ」とある。また, 「明治的背骨の大人物」という天野貞祐の言葉も載せている。
- 5) 清水幾太郎「安倍学習院長追悼の辞」『世界』第249号(岩波書店, 1966) 228頁。
- 6) 円地与四松「小宮豊隆と小泉信三と安倍能成」『向陵駒場』第8巻第2号(向陵駒場同窓会, 1966) 93頁。
- 7) 林原耕三『漱石山房の人々』(講談社, 1971) 191頁。
- 8) 1964年9月6日の日記『野上弥生子全集』第Ⅱ期第14巻。615頁。
- 9) 1966年8月18日の日記『野上弥生子全集』第Ⅱ期第15巻。467頁。ところで, 野上の追悼文「安倍さんのことさまざま」(『世界』第249号)は最も優れた安倍論になっているが, これについては稿を改めて論じたい。
- 10) 清水幾太郎, 前掲論文, 225頁。
- 11) 歴史学者の町田祐一は, 安倍を「明治末期における資力のない「高等遊民」の事例」として考察している。『近代日本と「高等遊民」 社会問題化する知識青年層』(吉川弘文館, 2010) 101～133頁参照。安倍は愛媛県松山の医家に生まれたが, 父親が早くに隠居したため, 貧しいというわけではないが, 金銭の苦労は多かった。
- 12) 『文部省推薦図書時報 第二輯』(文部省, 1933) 8～10頁。
- 13) いくつかの論考を挙げておくと, 五十嵐顕「在日朝鮮人の教育問題と戦後日本の教育反省について」『国民教育研究』35号(1966)。崔在喆「近代日本人の韓国観の系譜——安倍能成の場合(他)」『アジア太平洋研究』27号(2004)。中井真理「安倍能成と朝鮮」『清泉女子大学紀要』54号(2006)。中根隆行「安倍能成と京城帝国大学」『朱夏：昭和文学研究誌』21号(2006)。許智香「安倍能成(1883年～1966年)の思想形成と京城帝国大学——日本における西洋哲学受容と植民地朝鮮に関する一考察」(発表要旨)『立命館史学』36号(2015)。金光一「安倍能成と朝鮮—矛盾と逃避」『宇都宮大学国際学部研究

- 論集』第41号(2016)。
- 14) 芳賀徹「戦前昭和の日本人と韓国——安倍能成の場合」『日韓文化論』(学生社, 1994) 161 および 173 頁。なお、いわゆる保守派の論客として知られる平川祐弘も旧制一高最後の入学生であるが、安倍能成を高く評価している。「昭和を貫く自由主義者の系譜 安倍能成と竹山道雄——旧制一高校長と教授として出会った二人の終生にわたる交情」上・下『正論』516・517号(産経新聞社, 2014/15)。
 - 15) 鄭大均「序文」『日韓併合期ベストエッセイ集』(ちくま文庫, 2015) 14 頁。
 - 16) 林健太郎「自由の孤城に住みて」『移りゆくものの影——インテリの歩み』(文藝春秋新社, 1960) 82 ~ 83 頁。
 - 17) 「(四) 必読書目」『学生と読書』(日本評論社, 1938) 383 ~ 406 頁参照。
 - 18) 「人物素描 安倍能成」『経済マガジン』創刊記念号(ダイヤモンド社, 1943) 57 頁。
 - 19) 森田草平「私の知る安倍文相」『私の共産主義 随筆集』(新星社, 1948) 23 頁。
 - 20) 竹山道雄, 前掲書, 201 頁。
 - 21) 宇沢弘文・小林登「子どもを粗末にしない国にしよう——社会的共通資源の視点」
<https://www.crn.or.jp/LIBRARY/EVENT/EVENT11/TAIDAN03.HTM>
 - 22) 神谷美恵子「文部省日記」『神谷美恵子著作集9 遍歴』(みすず書房, 1980) 244 頁。
 - 23) 松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談 上』(岩波書店, 2006) 293 頁。
 - 24) 夏目鏡子『漱石の思い出』(文春文庫版, 1994) 244 頁。
 - 25) 宇野浩二「芥川龍之介」『宇野浩二全集』第11巻(中央公論社, 1973) 116 頁。
 - 26) 小和田次郎(原寿雄のペンネーム)『デスク日記3 マスコミと歴史』(みすず書房, 1967) 99 頁。
 - 27) 田中隆尚「安倍能成先生」『ももんが』(1966年9月号) 100 頁。
 - 28) 安倍能成「凡例」『西洋近世哲学史』(岩波書店, 1921) 第15版を参照のこと。
 - 29) 戸坂潤「現代に於ける漱石文化」(初出1936)『戸坂潤全集』第5巻(勁草書房, 1967) 113 ~ 116 頁。
 - 30) 多々羅三平「漱石門の人々」『改造』(1935年12月号) 299 頁。

安倍能成とは誰だったか？

- 31) 同上, 302 頁。
- 32) ここで帝大系・岩波系漱石門下と限定しているのは、鈴木三重吉、森田草平、内田百閒などには当てはまらない批判を問題にしているからである。
- 33) 奥野健男「漱石火山脈」(初出 1958)『奥野健男文学論集』第 1 巻(泰流社, 1976) 47～48 頁。
- 34) 本多顕彰「漱石山脈」(初出 1946)『孤独の文学者』(八雲書店, 1947) 74 頁。なお本多は戸坂潤によって「半門下の漱石文化人」に挙げられているので、自己反省を含めて考察していると言える。
- 35) 唐木順三『現代史への試み』(初出 1949)『唐木順三ライブラリー I』(中央公論新社, 2013) 150～159 頁参照。
- 36) 竹山道雄・鈴木成高・市原豊太・林健太郎・唐木順三「座談会 大正昭和の文化人」『心』第 24 巻第 2 号(1971) 35 頁。
- 37) 亀井勝一郎「教養人」『現代人の研究: 民族の変貌』(六興出版者, 1950) 127 頁。
- 38) 佐藤卓己『物語岩波書店百年史 2』(岩波書店, 2013) 39 頁。
- 39) 大宅壮一「安倍能成氏の死」(初出 1966)『大宅壮一の本 第 2 (人物篇人間鑑定法上)』(サンケイ新聞出版局, 1967) 339 頁。大宅壮一はすでに 1933 年に「遊蕩人格四兄弟 阿部次郎, 安倍能成, 小宮豊隆, 和辻哲郎の仮面をはぐ」で、岩波派帝大教授批判を展開している。『大宅壮一全集』第 3 巻(蒼洋社, 1981) 287～316 頁参照。
- 40) 岩波書店編集部「あとがき」安倍能成『涓涓集』(岩波書店, 1968) 307 頁。
- 41) 1966 年 8 月 18 日の日記『野上弥生子全集』第 II 期第 15 巻。467 頁。
- 42) 丸山眞男・吉野源三郎「安倍先生と平和問題談話会」(初出 1966)『丸山眞男座談』第 7 冊(岩波書店, 1998) 15 頁。ところで、吉野も安倍の無業績問題に触れている。「学問的な業績は別にして、私は安倍先生については尊敬の念を抱いていたわけですが、先生自身はそのことで多少コンプレックスを感じていらした」(4 頁)。
- 43) 山田宗睦『危険な思想家——戦後民主主義を否定する人びと』(光文社, 1965) の第 2 章「[心] グループ——危険な老人たち」41～54 頁参照。
- 44) 現代日本では、保守とリベラルの意味が、とりわけ若い世代にとって曖昧になってきていると指摘されている。筆者は安倍能成のケースを取りあげな

がら、この問題を考察したことがある。次の拙稿を参照されたい。

高田里恵子「安倍能成をダシにして日本における保守とかりベラルとかを考えてみる」(Synodos, 2019) <https://synodos.jp/opinion/society/23014/>

- 45) 久野収・鶴見俊輔・藤田省三「日本の保守主義 『心』グループ」(初出 1958)『戦後日本の思想』(勁草書房, 1966) 73 頁。
- 46) 久野収「ベストを尽くした生涯——安倍能成先生の人柄にふれて」(初出 1966)『久野収集 1』(岩波書店, 1998) 30 頁。
- 47) 竹山道雄「安倍能成先生のこと」(初出 1981)『竹山道雄著作集 4』(福武書店, 1983) 219 頁。
- 48) 清水幾太郎, 前掲論文, 227 頁。

Who was Nosei Abe?: Talking about him without letting him talk

TAKADA Rieko

This article roughly outlines the life of Nosei Abe (1883-1966) – the author of numerous books, including two autobiographies – by quoting and reconstructing the discourses among others about him. Abe is almost forgotten today, but as a philosopher, professor, Minister of Education in the aftermath of the war, and educational advisor to Crown Prince, he was once famous as well as much admired and criticized. From people's views on Nosei Abe emerges the characteristics of modern Japanese culture or political situation.

First, I discuss how Abe is seen as having no academic achievement despite publishing many books from Iwanami Shoten, a well-known academic publisher. Abe was regarded as a dilettante who merely introduced western science and culture, or an essayist without philological research or genuine scholarship. From this perception of Abe, we can see what is recognized as “academic” in humanities in modern Japan.

The next notable thing is that Abe was accused of being a “conservative reactionary” by the younger generation of Japan during the Cold War. However, Abe was one of the leading writers of Taishō-Culturalism, who advocated western individualism and liberalism in Japan in the early 20th century. Abe described himself as a “liberal.” In fact, after Japan's defeat in the Second World War, Abe was also the chairman of the left-wing peace organization headed by Iwanami Shoten.

Meanwhile, Abe expressed his discomfort with the labor movement and admitted his aversion to the Soviet Union and the communist party. Some people criticized these contradictions in Abe and some fondly re-

membered his harmless “slovenliness” or “magnanimity.” One could say that the mix of cultural liberalism and political conservatism in Abe is a typical example of modern Japanese intellectuals.